九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

方城炭鉱ガス爆発事故遭難記

鹿田, 則光
直方市石炭記念館

https://doi.org/10.15017/13772

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 16, pp.187-189, 2001-03-25. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

資料紹介　方城炭鉱ガス爆発事故遭難記

鹿田則光

死者六百七十七人を出した大正三年十二月十五日の三菱方城炭鉱のガス・炭じん爆発事故に遭遇して職員で唯一生き残った是松技師補の遭難記である。

この遭難記「聞き書き」は資源環境技術総合研究所九州石炭鉱山技術試験センターに保管してあった資料の中にあったもので、三菱鉱業株式会社筑豊礦業所の便箋に書かれている。旧字体は常用漢字に改めているが文章はできるだけ原文に近づけているため、旧送り仮名を使っているものや聞き書きのため著者が不明であり、誤字や脱落と思えるものもある。傍点は筆者が付したものである。坑内の位置で、数字は少ない方が地表に近いところを示している。特に難解箇所や脱字と思えるものは「　」内に注釈を付けている。

［表紙］是松技士補遭難記

六時間坑道を彷徨う　―生存者　是松技師補遭難談―

幸運にも九死に一生を拾ひ得たる技師補是松国雄氏が爆発後の坑内を約六時間に亘って彷徨し、漸く坑口に出でたる遭難談を聞くに是松氏は元気横溢せる態度を以て、語って曰く

「私は昨年戸畑明治専門学校を卒業して当坑に来り、同年十二月下旬重砲聯隊に一年志願兵にて入隊し、本年十一月満期となり再び当坑に来てまだ一定の仕事も持たないのですが十五日午前は坑内巡廻の為め安全灯一つを持て出掛け爆発の当時は左乃木片十卸の右十八片を行て居る時に突然爆音を聞きました。私の時計を見ると九時十五分と思ひます。此時左乃木片全部は溜瓦斯は有りませんでしたが噴出瓦斯がありました。其量は先づ二パーセントか三パーセント位でした。私は何事が起ったかと不審に思って後へ引返しました。爆音は低くして強くバウンとダイナマイトを四、五片隔てて聞く位でした。此響の為め鼓膜は一種変調を来して同時に附近には霧よりも薄い靄が襲って来ました。然し息［注、臭いカ］は感じません。さて十八片から十五片まで後戻りをして同所の巻場に辿り付きました。其間は別に異状はなかったのですが、其処扉は最早役に立ちません。巻場には難を脱れて坑夫五六名が来合はせて非常に狼狽して尻も落着かず今の響は高落ちであろうと噂とりどりであります。仮に高落とすれば其場所は何処であろうか、私は之を調査しやうと八卸から九卸へ登りかけますと、此処に図らずも甘名ばかりの坑夫が洋

灯も消さずに下りて来まして乃木片の方は煙が有ってトテモ行かれぬ愚図々々すると窒息すると言ひます。仕方がありませんから第三の新又卸に行かうとしますと先刻の連中は此方も駄目だと止めますから今度は連中と一所になって八卸に登りかけましたが私の前に進んだ二名の坑夫が其処も高落して居るから駄目だと言ひます。私共の進退は最早八方塞りで、此侭死ぬのではあるまいかと弱い心も出ましたが、何しろ大勢でありますから又引返して更に九卸しを登りました。其時私は一行中の後より二三番目に居りましたが其附近は愈々本物の煙が一杯に充満しておまけに石油の臭が頻にします。一歩は一歩と激しくなって来ますから其処でまた引返しヤットの事で十片と十一片との間なる水溜片まで辿り附き休憩したのです。時計を見ると十時八分で最前爆音を聞いてから大分時間も経って居ます。先刻の四名の坑夫も一所です。此中に二名のものが風が舞ひ初めた（煽風機より送れる風が来る意味）から今一度第八に行って見やうと言ひますから其処に行ってみますとまだなかなか瓦斯ばかりで一歩も進めません。詮方なく其処にある汚ない水を手拭に濡らして夫れを口に含み之を啜って元気を付けましたがモウ頭がフラフラして夢のやうです。こんな有様で十時卅五分頃迄風の来るのを今か今かと待ち焦れて居た甲斐もなくまたしても石油臭い瓦斯が雲の如く襲来して私共を取巻き真綿で頸と言ふ風に呼吸はだんだん困難を感じます。従って気も遠くなり意識の判断も朧になりましたら、私は最早此処で斃れる運命が来たのではあるまいかとがっかりしてフラフラ倒れました。然し之ではいかぬ男子の意地で最後の奮闘をして息の続く丈け行って見やうと勇気を絞り手拭を水に濡らして度々口に含み九卸に向ひました。実際私共モウ一つの遁れる路は九卸の一筋の血路であります。九卸を登って三方まで来て乃木片に来ましたが九卸の二片の風橋は無事で誠に幸運でした。九卸の捲場に来ますと此処には数名の死体と馬一頭が斃れて居りました。此中の一名は慥に女で悲鳴を挙げて居た様に思ひます。夫れから左の乃木片に来ますと図らずも瓦斯不混入の新空気が来ましたから地獄で仏に会った気で元気もつき濡れた手拭で顔なども拭きました。更に進んで乃木片四卸に来ますと此処にも二三ケ所の高落があり之を打越えて乃木卸の二上りまで来ましたが夫れから先は落盤為め一寸先きへの通行も叶ひませんけれど安全を期して二上り（其処には高落二三ケ所あり）を登って東郷上りを下りヤットの事で下風口［注、下風坑（入気立坑）のことか］まで辿り着きました。其附近全部の天井は墜落して居ります。時に十一時半です。此の間水の上から降って来る事夥しく蜘蛛の網のやうになった坑路の八重梯子を縦横無尽に歩いて着て居る服も何も濡れ鼠のやうになって居ったのです。下風口の下には棹取一名が呻吟して居りました。然し傷も受けて居りませんから元気を付けてやって話などして居ると外にも二名の棹取が近付いて来ました。一命を辛くも遁れ茲に互に無事の顔を見たのです。とても聞江はしないとは思いましたが私共は坑底からオーイオーイと一生懸命に坑口向いて怒喝りましたが声が届いたのか神の助か坑口から［注、エレベータの］篭電話機電灯とを送って来ました。第一の篭が届いたのが三時頃です。此時喞筒方の三名も来ましたから、同勢は都合七名となりモウ大丈夫と無事を祝して其篭に他の者を乗せてやって、第二の篭が三時四、五十分来まして池田技師が下りて来たので初めて私の無事が知れて夫れから一所に東郷卸の方を見に行きましたが黒木卸しと大山卸しの中間の門番一名と小頭一名が其処に斃れて居りました。其附近一帯は非常な大破壊で二度とは見られません。

そこで私以外の生存者は第二の篭で上げて仕舞ひ其中電話も開通して私は第三の篭で無事奈落の底から出て来ました。云々